表　題　震災後の小児の精神・行動変化について

分担研究　災害時の母子保健・医療対策に関する研究

研究協力者　稲垣由子・高岸由香

要　約：1995年1月17日、阪神淡路大震災は、一瞬にして5,500名を超える尊い命を奪い、阪神淡路地域に未曾有の大災害をもたらした。15歳以下の小児の死亡は400名を超え、600人以上の子どもたちが親を失った。現代の都市社会に暮らしていた子どもがこのような大きな災害による直接的被害を受けた経験はほとんど皆無に近い。欧米では、1970年代から災害後の被災者の精神心理状況に関心が高まり、1980年の精神障害の診断と統計マニュアルには心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ：Post-traumatic Stress Disorder）の概念が明確になっている。しかし、地震後の子どもの心身に及ぼす影響に関する研究報告は非常に少ない。また、従来の報告によれば、災害後のストレス障害の表われ方に関して文化背景や環境要因の影響は大きいと予想される。われわれは、1995年6月（震災後5カ月後）に神戸市中央区、東灘区の３カ所の幼稚園と三木市の幼稚園において、アンケート調査を実施し、総対象数632名中、488名（回答率77.2%）から回答を得た。その結果、退行現象、覚醒レベルの上昇、不安などの反応とともに、多くの前向きの反応も認められた。

見出し語：PTSD・幼児・地震・前向き反応

研究方法：今回の調査対象は、震災以前より神戸大学医学部小児科と協力関係にあった幼稚園の子どもたちである。全員が大震災の被害者であり、すでに各種の調査票が繰返し震災現場で配布されている現状を鑑み、実際の調査に当たっては、「単なる調査のための調査は絶対にしない。実際の調査は幼稚園が中心になって行ない、援助の必要な家族に対しては神戸大学医学部小児科が中心になってきちんと対応する。」という原則を確認しながら進めた。

(1) アンケート票

アンケート票の原案は高岸らが1995年2月末から3月にかけて使用したものを参考にしてＴＩＳＣＨ（東大小児科国際保健医療研究会）が作成し、神戸市内で実施したプレテストの結果に基づき、神戸大学医学部小児科と検討後に訂正を加え最終版を確定した。

アンケート票の内容に関しては、大きく被災状況、現在の環境、被災後の疾病歴、子どもの心理状況、親の心理状況に分かれる。　なお、

新須磨病院小児科，神戸大学医学部小児科

これらのアンケート票は、幼稚園を中心としたサポート体制に役立てる必要を考慮し、すべて記名式で調査を行なった。

（2）調査方法

1995年6月（震災後5ヵ月）に神戸幼稚園（中央区）、魚崎幼稚園（東灘区）、住吉幼稚園（東灘区）において調査を行った。年少クラスと年長クラスの在園生に対しては調査票を直接保護者に渡し、家庭で記入後に登園時に回収した。被災時には在園していたが1995年3月に卒業し現在は小学生になっている児童に対しては、各々の幼稚園により配布回収方法が異なった。神戸幼稚園では郵送あるいは近隣の人に言付ける形で配布し、家庭で記入後に直接持参あるいは郵送で回収した。魚崎幼稚園では同窓会時に直接保護者に渡し、家庭で記入後に直接持参してもらい回収した。住吉幼稚園では同窓会時に直接保護者に渡し、家庭で記入後に直接持参してもらったが一部は郵送にて回収した。

対象地区である三木市では、1995年6月に清心保育園とその卒業生が通っている緑が丘小学校および緑が丘東小学校において、調査票を直接保護者に渡し、家庭で記入後に登園または登校時に回収した。

（3）対象

総対象数632名中、488名（回収率77.2%）からアンケート票を回収することができた。神戸地区の幼稚園在園児における回収率は93.4%と非常に高く、すでに小学校に入学した児童についても65.7%（神戸市）、72.2%（三木市）であり、留め置き調査としてはまずまず満足できる回収率であった。三木市の保育園での回収率が63.3%と低かったのは、親の関心が薄かったためと考えられた（表1）。

結果：（1）被災状況（表2）

1）自宅の被害状況

神戸市では、84.8%、三木市では、18.8%で自宅が損壊していた。

2）家族の被災状況

神戸市では31名が家族の負傷を経験し、家族が死亡した子どもも1名いた（9.9%）。三木市では、家族が負傷したのはわずか1名だけで、99.4%は家族が無事だった。

3）子どもの親友や親戚の被災状況

神戸市では49名（15.2%）が子どもの親友や親戚が死亡したと回答し、三木市では8名（4.8%）であった。

4）地震後の転居経験

神戸市では転居経験のないものがわずか11.1%であり、親戚知人宅74.9%、避難所33.8%、車の中15.8%、その他10.5%と多くの子どもが被災後自宅以外の場所で寝泊まりしている実態が明らかとなった。三木市では、転居経験のないものが90.1%を占め、自宅を離れたものも多くは親戚知人宅であった。

5）地震後の母親との分離経験

神戸市では地震後に家族と分離せざるを得なくなったのは52.3%であったが、三木市では17.0%であった。

神戸市では地震後に母親と分離せざるを得なくなったのは15.2%であったが、三木市では5.5%であった。神戸市においても分離経験を

もつこどものうち半数以上が１週間以内の分離期間であったが、5名（1.6％）は母親と１カ月以上離れて暮らすことを余儀なくされていた。

神戸市では地震後に父親と分離せざるを得なくなったのは50.2％にのぼり、三木市では16.3％であった。神戸市においては22.9％の子どもが父親と１カ月以上離れて暮らすことを余儀なくされており、母親との分離と比較すると分離期間が長期にわたっているのが特徴であった。

（2）子どもの環境や日常生活

神戸市、三木市ともに99％以上の子どもが毎日通園通学していると回答した。神戸市では58.8％の子どもが毎日友だちと外遊びしていると答え、三木市では75.2％であった。神戸市では友だちと外遊びをしていないと回答したのが8.7％もいたが、三木市ではわずか1.2％であった。

（3）被災後の子どもの疾病

三木市では84.9％が震災後も病気をしなかったと回答したのに対して、神戸市では病気をしなかったのはわずか39.9％であった。神戸市では50.2％の子どもが震災後に病院を受診していた。

（4）子どもの心理と行動変化（表3）

震災後５カ月ごろにおける子どもの心理と行動変化について調査した。回答は「いいえ」「すこし」「とても」の３段階に分けて回答してもらった。身体症状、退行現象、持続的な再体験、回避や反応性の低下、覚醒レベルの上昇、前向きな反応について具体的に質問した。５カ月において身体症状を呈した割合は、他の精神・行動変化に比して低かった。しかし、現在も身体症状を呈している子どもたちには，種々の問題が集約されている面もあり、長期的なケアが必要であると思われた。

（5）親の心理状態（表4）

子どもの心理や行動変化は親の心理状態に大きく影響されると予想されたので、今回の調査では親の心理状態について質問した。なるべくＰＴＳＤ診断基準（ＤＳＭ－ＩＶ、ＩＣＤ－10）に合致する質問および小児に対するのと同じ内容の質問項目を多くした。回答方法は、小児と同様に「いいえ」「すこし」「とても」の３段階に分けた。

考察：未曾有の大震災による大きな被害にもかかわらず、震災後５カ月において神戸市の子どもも大人も日常生活が立ち直りつつあり、家族の絆が強まり、このたびの震災はいい人生経験であったと考えていた。現在までの地震後の精神心理状態に関するすべての報告は地震後のストレス反応に焦点を当てているが、今回のわれわれの調査は大災害後にも前向きな反応が表出されることを明らかにしたものである。

今回の調査は阪神淡路大震災のなかでも被害の大きかった地域を対象としているが、震災後５カ月の調査時点で神戸市内に居住し、子どもを幼稚園や保育園、小学校に通学通園させることが可能であった世帯に対するアンケート調査であった。したがって、調査に協力してくださる気持ちの余裕をもっておられる家庭を対象にした調査であり、親や子どもを亡くした方や震災後に家族が離散し恢復できない家庭などは対

象に入っていない。また、子どもを持つ親に対するアンケート調査であり、回答者は年齢的にも若い世代に属していた。その意味では、震災により非常に大きな被害を受けたが、精神的にも経済的にも何とか立ち直る余力と将来への展望を持ち得る方々が主たる対象であったことを考慮する必要があろう。

心理的反応に関しては、子どもも大人も地震に関する刺激を避けようとする回避行動はあまり強くなかった。小児においては心的外傷によるこころの混乱や興奮が退行という形で表現されており、大人では集中力の低下が著明であった。地震後の余震に対する恐怖や地震について繰返し思い出す持続的な再体験は、神戸市だけでなく三木市においてもかなり反応が認められた。大人も子どももともに強い反応を示したのは、いらいらや怒りっぽい、物音にビクッと驚く驚愕反応であり、年齢を問わず精神的ないらだちや不安定感が高まっていた。

阪神淡路大震災後の避難所では、被災した人は単なる精神的なダメージだけではなく、未曾有の大災害であったからこそ、そこからが学ぶことがあったと語られていた。具体的には、震災後、子どもたちは学校や幼稚園に行きたがり、何でもよく食べ、ものを大切にするようになり、家族の中では、大人のいうことを聞き、家の手伝いもするようになり、大人の目から見れば以前よりしっかりしてきたというのが子どもたちの姿であった。また、神戸市の大人の90%以上が自分の人生にとっていい勉強になったと回答したことは驚異的であった。

このような前向きな反応が、今回の調査がアンケート調査に回答する気持ちの余裕をもっておられる家庭を対象にしたためか、神戸という国際的な背景を持つ土地柄によるものか、アジア的な文化背景によるＰＴＳＤの表現の違いなのか、人類学や経済学をも含めた今後の学際的な検討が必要であろう。現時点では、あれだけの災害を被ったなかで学ぶべき面もあったと回答された貴重な結果を提示するに留めておきたい。

また、今回の調査で認められた子どもたちの心理状態や行動変化が、被災後の時間経過とともに今後どのように変化していくのか、長期間にわたり見守って行く必要があろう。

文献：（1）災害時のメンタルヘルス　日本小児精神医学研究会編，1995.

（2）阪神・淡路大震災とこどもの保健・医療報告書　神戸大学小児科編，1995

（3） Children exposed to disaster: Ⅰ. Epidemiology of post-traumatic symptoms and symptom profiles.
Shannon-MP;Lonigan-CJ;Finch-AJ;Taylor-CM
J-Am-Acad-Child-Adolesc-Psychiatry.1994 Jan;33(1):80-93

（4） Children exposed to disaster: Ⅱ.Risk factors for the development of post-traumatic sympytomatology.
Lonigan-CJ;Shannon-MP;Pharm-D;Taylor-CM;Finch-AJ Jr;Sallee FR
J-Am-Acad-Child-Adolesc-Psychiatry.1994 Jan;33(1):94-105

	神戸市		三木市	
	幼稚園	小学生	保育所	小学生
対象数	227	169	60	176
回収数	212	111	38	127
回収率	93.4%	65.7%	63.3%	72.2%

表1: 地域別対象数と回収率

	神戸市		三木市	
	(n=323)	%	(n=165)	%
自宅が全壊・半壊・一部損壊	274	84.8%	31	18.8%
家族の死亡・負傷	32	9.9%	1	0.6%
友人や親戚の死亡・負傷	49	15.2%	8	4.8%
自宅以外に避難した経験	287	88.9%	15	9.1%
家族から分離経験	169	52.3%	28	17.0%

表2: 被害状況

	神戸市 (n=323)				三木市 (n=165)				
子どもの精神・行動変化	いいえ	少し	とても	不明	いいえ	少し	とても	不明	P
地震に関する遊びや絵をかく	83.0%	14.9%	0.9%	1.2%	90.3%	3.0%	0.0%	6.7%	<0.001
ものごとに集中しにくくなった	82.4%	14.9%	0.9%	1.9%	89.1%	4.8%	0.6%	5.5%	<0.01
すぐに怒ったり，興奮しやすくなった	73.1%	22.6%	3.4%	0.9%	88.5%	4.8%	0.6%	6.1%	<0.001
小さな物音に驚くようになった	63.5%	29.1%	5.9%	1.5%	78.8%	14.5%	0.6%	6.1%	<0.001
地震について繰り返し話す	62.2%	33.1%	3.1%	1.5%	81.2%	13.9%	0.6%	4.2%	<0.001
ひとりで寝られなくなった	54.5%	33.1%	11.1%	1.2%	70.3%	21.2%	5.5%	3.0%	<0.01
暗いところを恐がるようになった	43.3%	38.7%	17.0%	0.9%	61.2%	28.5%	5.5%	4.8%	<0.001
ものを大切にするようになった	37.5%	48.9%	11.1%	2.5%	63.6%	22.4%	8.5%	5.5%	<0.001
家の手伝いをすることが増えた	37.5%	47.4%	13.6%	1.5%	59.4%	27.3%	8.5%	4.8%	<0.001
学校や幼稚園に行きたがるようになった	20.1%	16.1%	62.2%	1.5%	60.0%	9.7%	21.8%	8.5%	<0.001

表3: 5カ月後の子どもの精神・行動変化 (10 out of 30 questions)

	神戸市 (n=323)				三木市 (n=165)				
親の心理状況	いいえ	少し	とても	不明	いいえ	少し	とても	不明	P
日頃やっている仕事に集中しにくい	74.6%	24.1%	1.2%	0.0%	86.7%	10.3%	1.2%	1.8%	<0.01
災害に関する悪夢を見ることがある	74.0%	23.8%	2.2%	0.0%	85.5%	12.7%	0.0%	1.8%	<0.01
いらいらしたり，すぐ腹が立つようになった	52.0%	40.6%	7.4%	0.0%	81.8%	14.5%	1.8%	1.8%	<0.001
以前より家族の会話が増えたと思う	40.9%	41.2%	15.2%	2.8%	58.8%	32.7%	2.4%	6.1%	<0.001
物音にビクッと驚くことがある	20.1%	59.8%	20.1%	0.0%	35.2%	54.5%	9.7%	0.6%	<0.001
ものを大切にするようになった	12.7%	55.4%	29.4%	2.5%	27.9%	52.1%	15.2%	4.8%	<0.001
自分の人生にとっていい勉強になった	5.9%	35.6%	58.2%	0.3%	10.9%	46.1%	42.4%	0.6%	<0.01

表4: 5カ月後の親の心理状況 (7 out of 16 questions)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要　約: 1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災は、一瞬にして 5,500 名を超える尊い命を奪い、阪神淡路地域に未曾有の大災害をもたらした。15 歳以下の小児の死亡は 400 名を超え、600 人以上の子どもたちが親を失った。現代の都市社会に暮らしていた子どもがこのような大きな災害による直接的披害を受けた経験ははとんど皆無に近い。欧米では、1970 年代から災害後の被災者の精神心理状況に関心が高まり、1980 年の精神障害の診断と統計マニュアルには心的外傷後ストレス障害(ＰＴＳＤ : Post-traumatic Stress Disorder)の概念が明確になっている。しかし、地震後の子どもの心身に及ほす影響に関する研究報告は非常に少ない。また、従来の報告によれば、災害後のストレス障害の表われ方に関して文化背景や環境要因の影響は大きいと予想される。われわれは、1995 年 6 月(震災後 5 力月後)に神戸市中央区、東灘区の 3 力所の幼稚園と三木市の幼稚園において、アンケート調査を実施し、総対象数 632 名中、488 名(回答率 77.2%)から回答を得た。その結果、退行現象、覚醒レベルの上昇、不安などの反応とともに、多くの前向きの反応も認められた。